

2013年6月17日

筒井哲郎

柔軟な道

1. 「規則違反だけれども実質的には問題ない」

先日、茨城県東海村の加速器実験施設「J-PARC」における放射線漏れで、研究者34名が内部被曝し、外部へも放射性物質が放出された事故がありました。このことについて考えるとき、「単純ミスだけれどもその場にいる人たちの立場にたって想像すると、仕事熱心のあまり実験を継続したのだから仕方ないよな」という気持ちを抑えきれません。

わたしも現場作業に立ち会っていて、その種のミスはよく起こします。ちょっと管理基準違反だけれども、手順を端折って終わらせてしまおうとか、高所作業でもほんの一瞬だから手間を省いてしまおうとか、細かいルール違反を数えればキリがありません。野依良治さんのノーベル賞受賞が決まった時、「若い頃に化学実験をしていて爆発事故を起こして大怪我をした」とかいう話を聞きました。その種のエピソードは世間に珍しくありません。

先般、1万点近くのもんじゅの機器検査不履行が露見して引責辞職した鈴木篤之理事長が、「実質的な安全性は確保されている」と弁明して、池田原子力規制庁長官を怒らせたと報じられていますが（注1）、稼働スケジュールが確定していないのに、検査スケジュールを守れと言われてもやる気がしないだろうな、という感想を前号に書きました（注2）。

問題は、放射性物質を扱う仕事においては、仕事でも「仕事に没頭してはいけない」という、相反する2方向のむずかしい精神のコントロールを自らに課さなければならないということです。これは、単純なようでたいへんにむずかしいことです。

杉本鉞子さんの文章を引用します。

「私の知っている庭職人に、時間払いでなく、人仕事ごとに賃金を貰う人がありました。この人が半日がかりでした仕事を、それも庭石をほんの2~3寸動かすだけのことでまたやり直しをいたしました。でも、気に入ったところへ石を据えると、汗をふきふき、その傍に腰を下ろし、お金にもならない時間を空費することなど、気にもとめず、庭石を眺めながら、煙草をふかしているのですが、その顔には、喜びと満足の色があふれているのでした。この年老いた職人のことを思い出しますと、自分の芸術を誇り得る喜びを捨てて、何の価値があるかと思ったことでありました。私は庭師から職人、教師、政治家のことへと思い及びました。それはみな同じことなのです。誇りをきずつけるということ、努力の結果として到達し得た最高、最善なるものをも支え得なくなるということは、個人にとっても国家にとっても、その精神の発達を死に導くものでございます」 内田義雄『鉞子』講談社、2013年、P. 154

わたしが、もんじゅや原発作業員のやる気喪失に同情するのは、上に引用した庭師の気持ちと対比してのことです。最近の原子力規制委員会が募集したパブリックコメント（意見募集）にたいして「原発の安全な運転・保守・検査のためには、もっとも規則をがんじがらめにしなければならない」という意見を書きながら、自分がそこで働く人々から裁量範囲を奪い、かれらを精神的に投げやり気分に追い込むことに加担しているのだ、という気持ちを否定できませんでした。今日原発に限らず、「非正規労働者」といわれる人々もそういう境遇にいるに違いありません。

原発という大きなシステムほど、規則を緻密にして、労働者個々人の裁量幅を削っていき、精神を死に追いやって労働の質を極限まで低下させなければならないというのは恐ろしいことです。そのような状況下での労働により、ヒューマン・エラーが撲滅できるかといえば、逆の側面もあるでしょう。たとえば、JR 西日本の列車脱線事故の運転手は厳しい規則に縛られて、精神の余裕を無くし、事故の危険を知らながら速度を低下させることができなかつたと聞きました（信号に出会うたびに指差し呼称を強いられた）。

個々の労働者の裁量に任せてもいけない、規則づくめでもいけない、原発の安全は本質的に正解のない世界だと思われます。

2. 「重大事故シナリオを明示せよ」

原発規制のためのさまざまな規則は最近パブリックコメントにかけられたものだけでも 3400 ページあり、今後改訂されるはずの「設計基準地震動」や「構成機器の重要度分類」などを勘案すると、その 2 倍くらいにはなりそうです。アメリカの NRC (Nuclear Regulatory Commission) の規制基準文書はさらにその 2 倍くらいあるそうです。

日本の規制基準案を見ると、まだまだ曖昧なところがたくさんあり、当然意見を提出する側は、「もっと細かく規定しなければ、審査官の裁量に左右されることになり、不透明な馴れ合いの温床になる」と批判し、「誰が審査しても、淡々と進めていけば同じ結果が出るように審査規則を規定すべきだ」と主張します。しかし、個別にきちんと決められるのは、たとえば回転機器のベアリング故障といった類の、結果が予測しやすく、規模の小さな故障や事故です。大きな災害に結びつく、たとえば、今回福島第一で起こった原子炉圧力容器の破壊のような大事故の事故シナリオをあらかじめ規定できるか、という問題があります。

設備の規制基準を定めようとする、「どの機器のどの部分にどういう故障が起きて放射性物質の飛散が発生する」という事故シナリオを想定しなければ、「どの機器・どの配管・どの計器をどういう仕様に強化する」という対策が描けません。

たしかに、福島事故以前には、津波高さの想定が 6m 以下であったために、低層階に設置してあった非常用ディーゼル発電機が全滅したという、事故シナリオのレベルがお粗末でした。その種のハードウェアで解決できる対策は早急にやってもらわなければなりません。

その先にさらにヒューマン・エラーを含めた無数の事故シナリオがあり、すべてを列挙するのは不可能です。つまり、戦場と同じで、南からの攻撃に備えた陣構えをすれば、敵は北から攻めてくるわけで、あらかじめハードウェアや、シナリオが固まっている組織体制で、これならすべてのケースを包絡できるという対策はありません。ところが、原発が他の産業設備と違うところは、いったん事故が起こると、国民の 1/3 が避難しなければならないほどの膨大な被害が発生するために、「こころ辺が妥当だ」という妥協ができないことです。

結果として、再稼働を目指す政府と産業界は、「すべての事故シナリオをカバーする対策を立てたから、これで大事故は起こらない」と主張し、市民側は「まだまだこんなケースもあるではないか」と指摘します。テロ対策や航空機の墜落なども含めると、ほとんど収容所群島のようなシステムを構築しなければ原発の安全は不可能だという結論に至ります。このようなところに労働の喜びがあるどころか、『1984年』に描かれた監視国家が現出することになります。

これが、ロベルト・ユンクの『原子力帝国』が提示した「硬直した道」です。原発を稼働させることと「硬直した道」は 1 対 1 対応の関係にあって、原発を稼働させながら「柔軟な道」を創り出すことは不可能です。

3. プラント運営の現場

原発を止めるかあるいは再稼働するかという議論が、プラントの現場を見ないで、「再稼働をしないと GDP が 1.5% 下がる」などと、経済指標を眺めている人々の間で意思決定されつつあることに危うさを感じます。

現場では、多重下請けの結果として、直接被曝労働に携わっている人たちの賃金が 5 千円/日という低レベルであるために、まともな人は来なくなり、数も不足気味だと伝えられています。

様々な対策を講じて、ヒューマン・エラーは防げない、という問題が残ります。

今日のコンピュータ技術の進歩に合わせて、安全対策を含めた便利で包括的な自動化システムを構築すると、規模が大きいほどバグのないシステムが困難になります。便利だけでも、一旦間違いが起こるとその規模が巨大だという要素が、原発システムを構成する各分野のシステムの中にそれぞれ組み込まれています。

そういう実態を考えると、いかに安全なプラントを作るかという知恵比べの問題よりは、もし事故が起こったときに、その規模がどれほどの大きさか、ということが判断の尺度となります。

4. 安倍政権の「硬直した道」

安倍政権は、経済浮揚策の一環として原発再稼働を実施すると言っています（注 3）。また、安倍首相は原発輸出のトップセールスに力を入れています。既存の利権に支えられた

経済界の補強に注力するばかりで、原発以後の新しいエネルギーヴィジョンを展開するという計画性が見当たりません。古いものを補強すればするほどのちのちの方向転換が遅れます。外交においては、沖縄の基地を固定化し、中国や韓国を敵視して対米従属を強めるばかりで、冷戦後の世界の緊張緩和や互惠平等の方向に逆行しています。貿易においては、TPP を導入して、経済的にも対米従属を強め、アメリカの金融資本に国益を売り渡そうとしています。そのどれもが、硬直した過去の政治システム、経済システム、軍事システムに戻ろうとしていて、人々の心を管理社会の中で摩滅させる方向に向かっています。

5. 「柔軟な道」の方向

これに対して、われわれは個々人の精神の豊かさを目指す「柔軟な道」を選ばなければなりません。1970年代に、これらの皮相な産業主義が急拡大した時期に、エイモリー・ロビンスやヘイゼル・ヘンダーソンが提唱した「ソフトな道」は、その当時の公害激化に対する歯止めとして効力を発揮しました（注4）。その後、経済のグローバル化、米国の軍事行動などが新たな世界的ストレスを蓄積してきて、日本社会も古いタイプの管理社会に戻りつつあります。われわれは今日的な問題打開策を構想していかねばなりません。

簡単な方向性を、下表に記してみましょう。

分野	硬直した道	柔軟な道
政治	既存利権維持・統制型の強化	市民社会の拡大
軍事	対外敵視・軍備増強・核武装	雪解け・縮小・非核化
外交	対米従属	国連中心・全方位外交
貿易	国家主導型（インフラ輸出など）	民間主導型
資本	グローバル金融資本主義	市民の食と職と安全を擁護
エネルギー	原発・遠隔地プラント	地産地消型・再生エネルギー
産業	大規模組織化 補助金・助成金 例：電源三法・原発研究費	分散型 公平な市場環境創出 例：発送電分離
情報	集中型	個人レベルの分散型
サービス	GDPの量的拡大	生活の質の向上
労働組合	利権組織化	オープン組織
未組織労働者	非正規・派遣労働者・格差拡大 パワーハラスメント	最低賃金の引き上げ・権利の保障
社会保障	縮小	拡大
医療・Safety Net	医療などの営利化	シビルミニマムの保障

メディア	政府広報	市民の権利・透明化
学会	従属型・利益相反	独立型
環境保護	環境保護のための制約排除 例：遺伝子組み換え穀物輸出 公害輸出・排出ガス取引 「非関税障壁」との非難	国内法遵守 汚染規制
人権	無視	尊重

注1. たとえば、『日本経済新聞』2013年6月2日「もんじゅ崖っぷち」

注2. 「『原子力帝国』の硬直した道」『筒井新聞』第255号

注3. たとえば、『朝日新聞』2013年5月31日

注4. エイモリー・ロビンズ、室田・土屋訳『ソフト・エネルギーパス』時事通信社、1979年

ヘイゼル・ヘンダーソン、尾形啓次訳『地球市民の条件』新評論、1999年